朝夷巡嶋記　第四編　巻

13
1298
78

1278
16

曲亭主人著　第四編

朝夷巡嶋記

歌川豊廣画　文金堂嗣梓

村田

朝夷巡嶋記第四編叙

夢中苦樂非真情也然有甚於真情好讀稗史小說者亦與此相似其繙閲之際遇賢者薄命小人傲倖才子不稱時尚美人歸于癡漢等之事則扼腕浩嘆欷歔潤襟者有矣又遇奸邪發覺逆賊誅伏賢才應於徵聘孝節表于門閭等之事則欣然拊卷嗌噱終日者有矣顧其事毫無與於我身而意之所向不能自禁者何也蓋人性稟之于天天意好生而與善苟繙閲入其佳境得其情狀則坦然無私意於是乎雖婦幼理義分明善悪邪正豁

如此天稟之性使之然也古之名人才子為稗史小説以勸善懲惡者故有深意存焉若夫拘執不通為者外稗史小説之不合于正史以為誣世惑俗與所云不知夢之為夢而卜其吉凶悔吝不當則外其夢曰無益於事者何以異之有或曰周禮春官大卜掌三夢六夢之吉凶周人取焉占夢國史及左傳所書尤多彼稗史小説君子所不取也子之言之悖得非誣罔耶余對之曰史傳所載夢想事出於當時小説大約夢之與小説其虛實相半周雖有占夢之官後世無傳其法者以少驗也

然一夕遇惡夢者終日不樂賢者因茲倍慎衆人依之些憚稗史之醒蒙昧也與虛夢之驚癡人一般昔人嘗有戲夢之喻非但戲場之似夢稗史小説亦可以喻夢而夢有脩短猶稗説有巧拙也自非情景寫得至極之才豈可得能使世俗感動為哉余性磊落不嗜為人師唯垂帷辯客讀書綴文以送半生耳近又所著朝夷巡嶋記數編亦欲倣華胥南柯之頻其第四編五卷昨既脫稿因題數行於簡端于時文政庚辰年余月念二日也

飯台

蓑笠漁隱

朝夷巡嶋記全傳中輯第四編總目録

第二十一條　容進士柳營　思故人軍監
第二十二條　屯成六牛山　開發鎮守城
第二十三條　拔城義士功　攘魔良將弓
第二十四條　祛邪妙藥方　賊類大奸計
第二十五條　浮雲富貴草　濡衣弟古鳥
第二十六條　陣營水醮盃　岐塹淨器舟
第二十七條　珪浦曲道人　田居中女僧
第二十八條　一二関攻鼓　四孝子怨刄
第二十九條　雲中鐵撮棒　腰間栗柄丸
第三十條　靈佛菜摘籠　豪傑葛藤索

本編五卷目録終其第三十條以上總題目見初編及第二第三編首卷繡像之右

水草太郎五昌之
狗黨資
跖
鳳雛渴
堯
琴嶺
跖犬吠又陰行

火牛未放
珍浦五十五六方相
山頭推車
火牛既縱
大克不拷
鸞齊主人
城戸四郎武詮

匹夫有志
相從俱憂
荒廟為福
援主復讐
守忍菴
琴鎮
農夫
藁二郎
えんつうふ
圓通尼

奇計反間
似癡非癡
信天翁
題四郎
えびをのうせまる
海老尾加世九

清族無不肖子
名家負育名臣
雕窩老人
四高
下河邊小三郎高吉
間中隼人守直

是賊中賊
天罰奚遲
芳流舍
鐵猪矢藤五重連

列傳姓名畧目追加

武臣　三善入道善信　秩父莊司重忠　佐味兵内高利

義士　城戸四郎武詮　水草太郎五昌之

隠逸　倍田二郎在義一名浮槎道人

賊徒　象子彈平太貞持　悪別當訥愿

鵺夜叉　鵺夜叉　蛭富皿九郎

通計一十二名　この他初編より第三編まで見せし姓名畧目も第三編の巻のはじめに載せり。

附てふこの編絶ふ義秀ホ三友の再會ホ至て輟む看官只當面ホ就て

これを推さば。猶詳なるべしわれん。その義時の邪正光仲の得失義邦の

黜陟義秀の是非ホこれをもてまたまたこれを。第五編ホ解分べし。就中一段の脚色

吹編ホ。年々陸續刊行して全本ホなるべきものを。姓名略目追加終

朝夷巡嶋記全傳第四編巻之一

東都　曲亭主人編輯

中輯第三十一

進士を容るく抑營

故人弑　思ふ軍監

建仁三年の春二月下旬北條相摸太郎泰時ハ多賀藏人光仲ホを伴

伴て只管路を急ぐ程ホ太田の莊を出て。第二日の巳の比及ホ鎌

倉ゆぐ著ゆけるこのホ矢口を渡せし比ほど泰時既ホ帰著の注進その

ぞえありけるべこの朝執權北條遠江守時政相摸守義時評定衆大江

廣元同注所別當三善入道善信ホ出仕して。太郎遲しと俟ほどホ泰時ハ

まづ光仲主従を准備の旅邸ホ留めおく。柳營ホ參上て帰著のよし

申入れば祖父時政待うけて。躰く公文所ホ召入れて。みづから支乃麁を

訊ふ泰時答く。某一昨日。彼地ゐ下著し。駿河前司ゐ對面しく。御諚を傳へいひしゐ前司答くまく。某既ゐ隠道しく。烏髪の沙弥くり。綸旨命重しといふとも。今更弓箭を取はべるべき。但し祖父頼政卿より相傳せし雷上動の弓。水羽兵羽の靈箭ハ。女壻ゆくいたる賀藏人光仲といふゐ讓與いひし。彼光仲ハ廣綱が類ゐあらず。文武の智畧傑出しく。萬騎ゐ將たるべきもの。國家の為ゐ賢を薦む能と。挙あるひもの。是万民の幸なるべし。光仲をもつて經任誅伐の大將ゐ。廣綱則副將と。ゐりく。陸奥へ進發せんと。この議御許容ありしかば。即坐ゐ頭髪を剪拂ひく。抖擻行脚ゐ出んのみ。他事もなくゆとゐ。ひへくあん禀せるよりて。某已下を沒ぞ。彼光仲ゐ對面しく。その才幹を試ひしゐ。智辯言語ゐ顕はく。その武略餘りあり。前司の吹擧虚言ゐあらざるべし。その意ゐ任しく。光仲を

ゐるくまるれり。ゐるれども廣綱ハ隠道しく年を歴ぬ。ようや經任誅伐の副將たんとまうしたとゐいふ。その功あるべしく。鎌倉へゐりかへりく。よりく名代をまねくべし。數ゐ多くねども譜第の老僕間中集人守直を召れゆくといひしこれ。ゐ謂ゐ。ゐるゐ。わらねば強くその身を伴ふ。唯彼光仲守直ゐハ既ゐ參上しく。旅邸ゐあり。夏の顛末件の如しといふを時政ゐあらざるべ。今ゐたづぬ駿州のほう。俗名拙も。ゐるゐ增を吹擧しく。その身の不參奇怪なり。ゐ賀とやうん光仲とやうん能。ゐるゐ欲ゐるねどゐれ名をだゐゆくとなるゐる渠その素性をいふゐる。ゐめぞと問へば泰時答ハく。彼光仲ハ木曽の勇臣樋口二郎兼光が一子なり。兼光誅せられし比そぐ乳母の舊里ゐる。近江のゐ賀ゐ世を潜べ。絶角の比。ようしく京ゐる寺院ゐ偶居せしを。ほぐ祖翁上洛の折住持ゐ。て繰倉へ將て還りぬ。ほとり近く使れし。媼子井平即とれ。かくく彼人ハいゐる年。刀野

時夏が讒言ふよりて義邦義秀ふたりも一旦おとされ罪人となりしなり。
身の措処なき儘に武蔵の太田に流浪し。藍玉院ふ技助せられし日駿州
廣綱の家ふ寄よりけん竊にその素姓を問究遂に六條藏人仲家の遺蹟
とて。駿州の養女を妻せ廼ヨリ賀藏人光仲と名告らせ。又彼仲家へ
木曽義仲の兄なり。頼政卿の養子なり。又光仲ハ妻せり。駿州の養女
且見と云へ仲家の女。又光仲ハ木曽の老黨。樋口二郎兼光が子なりと
いへ既ふ風縁あるのみ。駿州とくるる呼ばへ豈偽ならん。壻ふせんや。されど
婚縁ハ家事なり。漫ふ忘れ給ふ。女をもとめ妻せりとも渠ならでいと
やすからぬ。經任誅伐の大将ふ吹擧せんや。その素姓ハとまれかくまれ仲
家の遺蹟なり。廣綱の女壻なれば任用せらるべ。の筋某この義をもつて
相具してそゆへといふふ時政呆果く眼を睜り顋を反らく且ハ抜ハそいむ。

忽地小膝を磯と打く斑ふ脱る歯を見らく呵こと冷笑ひ太郎ハ日来の挙
動年歳ゆハ増くこんゆもど毛尚童でありけるふ彼樋口兼光ハ朝敵木曽が
股肱なりく誅戮せられしなり。あるべきやかれば件の光仲ハ朝敵の残黨なり。
ようや天地ハ反覆しく弥勒の出世ふ値くやでも用ひらるべ。ゆいあるべ。それ
のみならず光仲が媼子井平あるいハ一旦ハ仕へしめ渠ハ如此この咎
あるべ下野へ追遣りつ刀野時夏ふ隷なり。ふ彼地より逐電せし。寔ふ
嗚呼の癖者なり。許をべ。奴ゆハあら孫ど。吉見冠者が等類なりとて不慮の
大赦ふあのもふ僥倖なるべきふ又駿州を誑惑しく。その胥ふ憑ふかのく
なる名をつけく世を欺くく栄利を揚る大膽無敵の癖者なるとなく
まあるいハゆゑや又駿州もなるるぐ。彼奴を木曽の残黨とそなんくも
女壻ふせしハ野心ふしといべくぞ。その胷臆を推さぐしく。りかふ非草ふ

斧鉞を授け軍兵を從ハせたく此度の大將ハせられたゞ征夷をゞ得討ぞ〻く。二張の弓を弯ゞ元弦見も亦ゝ為べくぞ。井平奴を追ひ久せよ由をゝ。うゝ元ゝ。うゝ元ゝ。と席を拍く敦圃ハ義時ハ父ゝ元ゝ。ゝて釋く父ハ對ひ大人の遠慮ハ然ゝとゝ。彼光仲を朝敵の殘黨とせゝ。ゝえハ聊道理ハ恊ひぐゝとのゝべ時政ゝハ亦ゝ。ゝと眼を反せゝ。ゝ。ゝ通ロ二郎義光ハ義仲粟津野ゝく敷れ後降人ハ形ゝく。ゝ。ゝ。ゝ

らを匈奴を擊ちて大功あり。近くは天朝源頼信朝臣はいとゞめ摂家の家
令なりしかども。冠位後四位上鎮守府將軍左馬權頭に昇進し。
内昇殿を許されき。武略神妙の聞えあり。人を用ゆゝ實を取るべしゝ。
虚名に惑されんや。且光仲は総角の比よりして京鎌倉に浪人つゝ
らく大人に仕へんその願ひゆゝしかるべし。夫潛龍のいまだ時を得ざるに日
穴を鱓鰌と俱にすまゝ終に池中の物にあらず。渠が大人に仕へ日を
その賢を考ずして遠く下野へ追退け。今その賢を考ずしてこれを
召用ひるはいまだ是愆を累ねるにあらずや。もしかの家に仕へしめば國
家の大任に當らんや。是ひとり家の譽のみ。他人の羨む所なり。東國ゆて
名ある武士を甲乙と擇用ひて。賊を擊せるに再度の戰ひその
利なきは奥羽にはなく擾騒なかりしに老功の勇士といへども又その募に

應ずべきや。光仲はこれと異に進て賊を擊て功あらば賢弐招くべし。道
理なけれ。武を將たるの一術なるべし。又その戰ひ利なくして卿士の
傷損にあらざる猜忌の臆念をかくしてもの。駿州の吹擧に任せざるべ
安全の説なるべしと言葉を盡して諫しぶ廣元善信感嘆して相州乃
異見道理に稱へり。愚老はかくこれにまさるの何ぞあらん。支の趣を
言上して光仲を召出し。猶亦武畧を試みるべしその才あるにあらば任用
あらまほしけれと衆一同に勸めしぶ時政は已にそゝのかされ遂にこの議に
隨ひて義時と共に泰時を招きまぶ尼御臺の方にまうゝ廣
綱の吹擧。光仲のこと。義時はかの異見の趣をまうし答えあげしぶ尼御
臺うち頷きて婦女子のこゝろにあらざる人を知るべしとのたまはれども相州の
異見いと懇ろ。公論とそのべ疾將軍家頼家に仕へあげくその光仲と

やうん用のべたのうぶとろーく相計ひさせそうと叮嚀ふ仰ぐ時政義時
うけまつりたく躾て将軍頼家卿ふ京の趣を言上ー明日京賀藏人式。
百さ定めべーとぞ定めるこの時頼家卿ハ日夜淫酒式耽ーく政ふ親このうと
或とたく鷹を放獣と狩ぐーく遊山琵水の為ふ民の愁式物ともせどふ
とたを鞠と鼓雙陸ふ興を催ーて酒宴遊興の為ふ國の費と省ぞとをふ
より奥六郡の賊乱いまぞ鎮ざれども。ろうふかるる氣色もなく又光仲ふが
る式世のけどもみづから擇用のんとも志ハぞされば國の大事ハ執權北條一家ふ
ぞく尼御臺の決断ふあり。この故ふ忠臣ハ遠ざけられく。諫言の路塞り好
佞ハ時を得ぐ。諂諛の門を開たり間話休題かくてその次の日ヨ賀藏人光
仲を召ふよりて登営を。間中隼人守直もそぶ後方ゆぞ後ひる唐綱の
名代ぞ見ゆり。執權北條親子ハ内ぐ大江三善の評定衆和田
畠山。比企三浦の諸老臣みな営中ふ参會つ既ふく頼家卿山鳩の間ふ
出まるまへ尼御臺も亦光仲を御覽ぜんとく羽平簾の裡ゆぞをーー
やとその夏の為体整ぞ齊ぞとーく。諸士禮服の色ぞ秋の林と染ぞ如く。
又烏帽子の高低ぞ春の山の連るふ似ぞり。程ふ光仲ハ花田の素襖ふ
掛烏帽子ーく黄金作の小刀を佩進退ぞとく作法を守ぞて間中隼人を
後ぐ。泰時ふ導れく。遥ふ平伏ぞる程ふ泰時ハ謹ーくその姓名を披露せり。
當下向注所の別當三善入道名信豫ぐ仰を禀ぞりけ斑を出ぐ光仲ふ
うち對ひ駿州ハ隠遁の義をつく。此度の參府と辞ーまつりーー和歌を
薦まつりて條聞食入ぞる呼ぐ。ぞれば善信仰ふよりく聊和歌ふ同ふ
とのり。経任ハこの年来六郡を掠奪ーく矢種兵粮ふ富りと仰ぐ襲ふ破
ると速ぞぐ。對陣時日を累ぬりとたハ御方ハ兵粮遂ふ竭ん是主客の

光仲徴されて頼家卿に謁す
頼家卿
ひろ元
時政
よし時
やす時
光仲
重忠

勢ひおのづから然るあゝ。故左典厩足利義兼の功あるもあるまじ。
よもつかれば彼経任ハ寔ふ烏合の山賊なれども侮りがたし呼あり。
和殿甚麼ある謀ある軍慮の大意ぞよ問まく光仲袖うち
合せさしゆ謀を帷幄の中ふめぐらし勝を千里ふ決するあれそ良将の
うふあり。光仲いまぞ賊の強弱を見ぞのまぞその地理を推究るふ暇あ。
唯居ぐあゝ勝敗を未然ふ訣るあゝ。あらんや。あらまどを順をあて逆と
討ふ克ぞとのまとあるべらぞ。左典厩の功あるもへ御方ふ野心のあるく。
軍略合期せざればうゝん夫天の時ハ地の利ふ如ぞ地の利ハ人の和ふ如ぞ。
一人必死を究ふとハ十人これふ敵ぐ。十人必死を究ふとハ百人これふ
敵ぐ。百人必死を究ふとハ千人これふ敵ぐ。千人必死を究るとハ
萬人これふ敵ぐ。宜あり。戦の場ふ臨く生んと欲るあハ亡び死せんと

欲るあハ生く。兵を寔ふ凶器あり。この故ふ三軍ふ将るあハ獨功と貪
らぞ苦楽を士卒と俱ぐ。軍令を正ぐ。賞罰を明ぐ。死士を
養ふあり。孫子の地形編ふいはぞ卒を視ること愛子の如くを故ふ俱ま
死ぶべ。九地編ふ又云三軍の衆を犯ることハ一人を使ぐ若くをこと。
亡地ふ投ぐ然後ま存をあれを死地ふ陥れく然後ふ生といはれ兵を
行の要彼を知り。己を知ぶ必克。彼を知ぐ。己を知ぐ或ハ勝或ハ
負彼を知ぐ己を知ぐ戦ふ毎ふ必負く。是孫氏が誡る所ぐ。攻伐の
要領あり。かれば軍器ハ今ていまく説ぶべ。一ぶ賊塞ふ陥く。
その地理を考へ屢賊兵を誘ふ。その虚実を察。撥ふ陥ぶ変ぶ応ぶ。
短兵急ふ拉ぶ経任幻術あり。この故ふ施ふ暇あるべ。孫子曰
矢良ふ弓ぐ当く速く賊栅を援ぶハ彼が矢種ハ我有り渠が兵粮の

第三段の所ハ即御方の資ゑりと成りく某ハ兵粮の績ぞ云ひとせば。只経任が首を獲るの一日も速あらんことをおのゝ是併君の御威徳ハ依るのみにて。叨ハ才学を演るハあらぬ。尊向黙止ぐ云ひゆゑ聊愚意を申さんのみ。過言ハ許させ給へと。おそるく答へ。善信入道いさゝか将軍御母子を尋ねあとにて。大江和田畠山の諸老臣おのく耳を側ゝその宏論ハ感服し。現賢綱の吹挙。私情ハあらぬ。経任追伐の大将ぞ云ひ人ハ申さんあらんと。云ひざるをんなりけり。そゞ中ハ時政ハ目を斜めに光仲をとこ云かゝ云ひと半晌だり。その人ぐの美し云。その辯論の奕奕たる絶くむしの井平ハぬぞ。渠の間ハ習諳とかく遅し云ひのみありけん。寔ハ人の才だり。揣摩かゝ云ひのみ云ひとりあぐふいと唱くて。なほのひ知るとも云ひ云を義時ハその氣色を察ゝ。廣元ハ目を注ぎ云ぞ。廣元

ハ云くその意氣沼く。同列ハ會釋ハ各位何とゆゆしく藏人の才器その任ハ當れり。萬卒ハ募易く一将を獲難し任用せるべ云ひの秋呼存をヤ上れよとのハ義盛重忠ハ辞ひゝく嘆賞し。彼人の義論甚ゝ。駿州ことぐ副とゝぶべ功成んと疑ひ。薦揚勿論ハゆと衆一同ハ応ぶ。時政ハ已ことを沼ぐ躰くゐん前ハ衆議の趣を執達し。且く奉る旨あゝく退云く。光仲ハうち對ひ前駿州の壻云賀藏人此度その薦ハ因て即進士ハ擬せ云れ。新ハ御家人ハ石加く経任退治の大将ハ仰付ゝ。駿州と共ゝ奥州へ進發云く。日ゝぐ功を奏ぶべ云ひ。武藏下総の守護御家人ハ別ハ御教書を申ひ云ひ。軍勢催促しく引領しく發向せ云れよ。但し光仲官職なゝしく大軍ハ將さゝぶ東國の武士偏りて。その軍令ハ従ハの稀云るべ云狭ゝして今假ハ外従六位上ハ叙し藏人ゐ

ありさま。叙爵のるゝ使者とりく京都へ執奏せらるべ元めゝ冥くこまそを存もべ〻と最ゝ命を使ゝく又守直を召近つゞ此度藏人ざりく經任退治の大將ゝるゝとり立ゝ〻ゝとゝくゝ駿州のゝ乙ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ依ゝせゝゝ。かゝれべ駿州これゞ副とゝく大功を立ゝるゝ〻台命既ゝかくの如〻罷ゝゝゝゝゝ主ゝ告ゝゝとひとゝくこれ彼ゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝ謝せゝ當下光仲ハ席を避ゝく額を著元某草莽浮浪の身とゝく不慮ゝ御家人ゝ召加らゝ剰此度の大任を奉ゝのまゝ毫末も功あゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

その軍監とえらる。鎌倉武士はみな羨べり。兵内が所望時宜に協へり。
べしと思せり。廻佐味兵内を軍監とす。光仲はと俱に陸奥へ遣せ
ばと仰出され。光仲廣綱に御教書を賜つ。征伐進退その意に任
せて。大功を立べしと再て命せられしに光仲守直恩命を稟て
退て。遠侍に退たけり。かくこの日當坐の老輩及當番の者侍まで。
光仲がほとりに来て。姓名を告かへ。慶賀を述るあり。要時は引も
なくぶりき面目身に余まりてぞ見えしける。そが中に時政はさろ竊に
恥しとけん。光仲を尻目にうけて。されども知らぬ面色をされば光仲も。
鎌倉に逗留の程軍議公務にかゝづらひて。執權の邸に勤仕對面と
請へ折も時政はさる外さまく歎待しく。昔年のうらみ忘ぞ又義時は
泰時しく光仲を問慰めいと懇切ゆゑ管待ける。光仲は是彼の親

疎にうとくうつかず。執權のつれなくげなるにそのあろ察し易し。相州義時の
真實ここにたへその胸中揣ぐべし。されば此度の大任は幸ひに似て却
危し。前司殿廣綱の隱遁は故あるけりと彼に就て毎度に
いとゝおそれ慎みけり。見ると先に間中隼人をムロ命の旨を廣綱に
告んとて後者を招く武藏なる太田の莊へかへり去り。光仲はその日より。
佐味兵内が第に移て軍兵をまつ程に兵内は光仲の人柄と景慕
なく竊に己が志を説示し。又義邦の夏をもて折に觸てはひの出る。
光仲も豫てより兵内が名は聞つ。まづその人とあやまち推たるに学問も
大きなるに忠義の壯健なりければ。渠が遊藝をもて賴家卿に仕ま
つるにその本意はあらぬとて。猜しく疑はぬ。下野にくあるる。
義邦のうへはなり。廣光がる。朝夷がる。去年の暮春の三日の夜に。

勝澤の松原ゆく時夏ゆを防留めくる夏の紛まゆ義邦ゆ別れし後の
こぶる人さ人憂驩苦樂幸不幸。もぞくかちもく物ゑまべ公内ハ義
邦の薄命を嗟嘆しつ。ゑ恵ゆ官途ゆ進ゑく。さ原豪傑の圓居ゆ
得値つぞ遠憾死限りもり。もろハあまども。此度の軍ゆ後ふと月来の
素懐ゆ稱つ。彼人擒ゆかるとぬとも。ちゆ悉もくあらんゆハ義をこんく
やもく勇ゑあと火急ゑ柵を攻破らハ再會その期あるべしとく頻ゆ
軍兵を催せども名ある武士ハ光仲ゞ下風ゆ立んことを恥てその催促ゑ
従つぞ。十日ばかりを歴る程ゆ武藏下総の端武者百五六十騎絶に
参集ひしべ。今ハ何日まぐく俟べ死とく。光仲躰く出陣と時改まぞ告ゆ
けり。もろもろ頼家卿ハ日どろの醼醉ゆ酔て。聊不例もりもれハ再て
見参ゆ入ゆ及ぶぞ。廣元善信奉りく軍用兵粮の下知を伝へその

日ちん暇をもろしべ。光仲ハ次の日の未明ゆ件の軍兵を招く。佐味公内
高利と共ゆ鎌倉を辞しもりつ。その明日の曛昏ゆ太田の荘ゆ馬を
ふまべ。廣綱も豫てより出陣の准備しく公内高利ゆ對面し一日
人馬を休めさせく衆一同ゆ進發せ老ろのハ甲乙と。且見姫ゆ隷
らもく。荘院ゆ留まる。その他間中下河辺加世九ゆハさももり一郷の
荘客们も。廣綱の德義を慕ふく。血氣壯ものハ招ざれども
従ふあるもの。二百騎ゆハ足ぐるけり出陣の規式。留別の情状ハ説
もるもゆ想像るべし。さる程ゆ光仲廣綱ハ途もぐり軍兵を催促しく
するるど日来行く。陸奥の國府ゆ著しべ。五百餘騎ゆぞもりゆける。

中輯第三十二

屯成六牛山
閑叢鎮守城

ヨス賀進士藏人光仲ハ五百騎ヲ過ざれども勝負ハ兵の多少ヲ
よるぞ速ヲ寄近づき。賊の虚實を察んとの廣綱この淺ヲ隨ひて。
馳く國府をうち起つ。五百餘騎と二隊ヲ分けく光仲を先鋒とす。
廣綱ハ後陣ヲ打せく。夜ヲ宿り日ヲ進む賊の大將蘇塗鶏東二
刀野時夏ホガ楯籠る。鎮守府の城ヨ程近ク六角牛山の麓ニ。
要害の地ヨ屯せり。是より先廣綱ハ諸軍兵ヲ示さ平ラ年来
弓箭を捨く。栄枯の際を脱離せり。此度の副將ニ為ハ已ニ成
得ざるの義ヨリ。光仲ガ智計ハ廣綱ヲ過ぎること遠し。更ヲ助言ヲ
及ぶべく。渠おのづく武畧あり。當家相傳の弓箭を既ヲ
彼人ヲ讓与ふ。經任幻術あることも。靈弓神箭の德豈虚カ
んや。支皆鎌倉殿のち為ものべ。おのく一致のところ。軍功を励む

べし。と説諭しく。ところ成光仲ヲ自已の才学ヲ誇
らぬ必まず廣綱の旨ヲよく事を行ふと欲せ。廣綱とめて從ふ。
凡大將ハ賞罰ぞくそのくヲ先ず天子將軍の仰とかあ
用ひざる所ヨリ。和漢今昔三軍ヲ將ヨリ副將軍の指揮を受く。
支を行ふ。あらんや攻伐進退和殿の隨意ヨリ廣綱ヲ問ふ
ふと制しく。とを聽ざりけり。この支の趣を軍兵ヲ伝へ。
かくの如し。大將不測の軍略あらんと憑しくヨリ。絶く
偽るあらんヲ光仲ハ。ヨリ礼儀を正しく士ヲ下り。賞罰を明ら
ふく。これを將ハ。しけ。士卒みな歓びく為ヲ死んぞ樂ひ。
又光仲ハ鄕ヲ鎌倉をうち起く馬を太田へよせ。比竊ヲ海老尾加
世九ヲ謀を授くいの。汝ハ。ところ利ところ兵十人をわく馬商の

模様ゐ打扮。間道を走く經任が厨川の柵ゐ赴く風いと烈しく日を
俟くその兵粮を燔うゝ追伐の軍兵よりとゆゑ經任はその前代
御ぶて後の戍ゐ等閑ゐ説示せば加世丸ゐ所沼果て
馬商ゐ打扮つ諸軍兵ゐ先ゝ陸奥へぞ赴くるさ程ゐ
鎮守府ゐ蘇塗鵜東二暴道ゐ追討の大将寄ると偽て間諜の
兵を遣ゝ敵の虚実を探らるゐ此度寄手の大将ハ駿河前
司廣綱の壻多賀藏人光仲とゐゐ廣綱とゝが副将ゝ。
その勢絶ゐ五百騎ゐ過べくぞ既ゐ切処とゝ塞ぐゝ六角牛
山の麓ゐ屯ゝ。その告ありけゝ暴道躯て騎馬を平
泉ゐ走らせて經任ゐ注進し俄ゐ四門の戍を倍ゝ刀野時夏ゐと
集合ゝ曩ゐ足利左馬次義兼累世名家の上将ゝて數

千騎を率ゝ寄せゝ平泉ゐ火攻せゝ只一戦ゐ利戎
喪ひ立足もなく逃亡ゝ況て此度の大将ゝ多賀と中ゝ光仲
と中ゝ名をぞ伝ゝとゝ只彼廣綱ハ源氏の類族ゝと
ゝ寿永元暦の間源平の戦ゐ。そのゞたるゝ遁世
せゝ多賀ぞその本意推ゝ。加以その軍兵ハ五百騎ゐ過ぞ
とゝ。ゐゝ。ゐ足るゐ。ゐ足るゐ。ゐゝ。ゐゝ。ゐゝ

暴道時夏軍議を角
刀野時夏
うるとうこゆみ

敵を追ひ拂ひ居たりその前を受んと後難いとゞ脱るべき和殿へまれくゆゑ時夏ハ當に當て寄るゆ白沫吐せくれんとれ
とゝろん徒ハ去この後ハ從ハれ敦圍たく論ゞまゞ早雄の賊
兵ハ大くまくまゞ雷同し刀野殿寔ハ然し敵ゆ五百騎味方も五
百騎牛角の勢ひありあぐ城下を蹄よりけさせんや後ハ人といさゝ
立を暴道急ハ推甚めこいゝハ謀の軍かせそ只今出く戦ゞ
寄ゆの望む呼ん枉くゞぶ意ゝ任されと禁めても留ゝを時夏ハ
呵くと冷笑ひ寄ゆハ既ハ長途ハ疲労し不知業内のゆめそあれ
逸をゆく労を撃べゞ克ゞといゝとあくん時夏ゞ志を則衆人の
あゝろん衆議ハヨ聞ハつくしよゝまゞ孟の食議ハ時を投さべ主
客必位を易んみハ立ゞゝと罵騰げハ暴道怒く声ハ立時夏

傷若無人ゝれ苟ゆ當城の大將ゝり一已の功を貪りて軍令ハ背く
あゝ斬らん。ゝゝゞゞ出く戦んと欲るゆいとヨゝゝゞ制しがたし。
進く敵を殺んとゝゝゞれ亦一計あり。鎮りて出ゞゝと呼く
制ゞゞゞ時夏僅ハ亂式おさめく舊の席ハ著よけり。當下暴道ハ
時夏ハうち對ひ出く敵を撃んとゝゝゞ意ゆハあゝねゞゆ衆望も
亦黙止ゞゝ。ゝゝゞ太郎ハ三百騎をゝく六角牛山の屯を撃べし敵
ゆ必斥候あらん城より逆よ出ゞゝと出ゝゞゞ色を釋ゝ逆進ゝて必合
戦ゞゞゝゝゞゞ輕く戦ゝく偽負く敵を誘へゝれハ百餘騎をゝく
龍蛇茂林ハ埋伏ゞゝ。その過ゝゝゝ後陣式撃人太郎も一軍しゝて
返ゝくさゝ挾く攻撃ゞゞ一戦必勝疑ハ。ゝゝゞゞゆ敵もその伏兵あん
ゝ式察ゝく俄ゝく逃るを追ゞゞ物ゝゝゝゝく城ハ入ゞゝ。寄ゆ本

陣ゐ還る比へ途ゆく日ハ暮ぬ。引ゑ百騎を率ゐ潛ゐ敵の
迹成つゆ。夜ゐ紛まて風上ゑ火を放て屯ど燔ゑ備ゑるとゐ暇あらで。
敵兵必乱ま騒ゑ太郎ハ又黄昏ゑ。三百騎を率ゐ城を出遠ゐ火の
光ゑを目ゑ走く六角牛の屯ゐ推寄せ横ざゐゐその逃ゑ給ハ光仲
廣綱翔ゑ追ゑ唯く。擒ゐ捕ゑ。
その期ゐ恢ゑ。とゐそぐせ時夏ゐハ悦ゐ。腰兵粮の准備し。
俄頃ゑ城の東門ゑ旗を進ゆくゑ出れハ早雄の賊兵三百騎時夏ゐ
後ゑく。六角牛を望て寄せんとゐ。その暴道ハ賊兵百人を留て城を
守らせ。ゑぶ身ハ百餘騎を率く潛ゐ西の城戸ゑ出く城を去ること十四五
町。龍蛇茂林ゐ埋伏ま。敵の過ゑを俟く。ゑ程ゐ進士藏人光仲ハ
ゑゐ六角牛山の麓ゐ屯ゑ。ゑぶ間諜の兵を率く賊の動静虚実を

窺せ。この日廣綱高利を召ゑ守直高吉ゐを聚合く合戦の策を問ま
ゑ。佐味高利ゑゐゐ。某昨夕六角牛山ゐ登りて遠ゐ鎮守府乃
地形を考へ在暁の月れ出ゑゐ平泉のゑを眺望ゑゆ。ゐそれ
ゑも猶遠く東北のゑゐ當りく天色赤ゑ紅然も昨夕ハ甲夜ゑ
ゑく。東南の風烈ゑれゐゐ。厨川ゐ変ゑゑ
ゑべ。路遠けれバゑ原や否定ゑゐとゑ成知ゑて。
亦これを知ゑ。是則別事ゐゑ。光仲微笑て某も
川へ遣せゑ。渠ゐゑ彼処ゑゐゐ。その兵粮を燔ゑゑ。厨川乃
柵ゑ。経任ゑ根城ゑ武器兵粮ハ其処ゐゑ。追伐の軍
兵むゑゑ及ぶく。根城の兵粮焼亡せバ経任ゑゑ疑惑て反忠の
ゐゐとゑゑ是ゐゑ賊と刃をゑ。その鋭鋒折くゑ。

その謀を三三ゐかと密かに説示せば、二内高利をさそふあり。守直高吉ハ、みずからその武畧感佩せり。折しもあれ山風颯とおこり、まく陣門に建うける鉾識を吹断く。鉾ハ西へぞ傾けける。衆皆これを見て、色を失ひつ。こハ必御方に利あらじ。あるべ忌こしやと思へどもおのゝ〳〵黙然たるぞ。中に廣綱ハ驍ぶる氣色あり。藏人今山風の鉾を吹傾けしハ、えゝてそあらめ。と見て知るやと問ひて、雲時沈吟して、されば。今一陣の狂風ハ東北より吹来れり。便是賊の大将ホゴ猶龍る鎮守府のうちに直ぶ。かゝれば賊兵數を盡して逆ふせさる兆なるべし。欲先ぶ人を征し、後ぶ人を征せる。然らばいかゞせ。逆撃べ必利あらん。尊意いかに。と問へ。その辞いまゞ詰らず。斥候の兵走還りて大床のわたりに賊軍一隊三百餘騎。ちかきを望みて、間世町ゆに過べきぞ。防禦の術と急せ。と喘ぎ言ふ。廣綱笑てうち頷き、さまでハそ藏人が計る所に過ざりけり。合せの戦のゝ物よく軍配せ。よといふまに、光仲一議に及ばず。うけたまはりぬ。某ハ三百騎を率ゐて先鋒に進むべし。大殿ハ百五十騎を率ゐて後陣に續せ。ゝ欲某豫より地図を考ゆに鎮守府を距ること十四五町ばかり。龍蛇茂林といふ切処あり。樹立隙なくまべ路いと暗く、人馬の進退不便の地。彼蘇塗暴道ハ經任が軍師にて智術あるべ。とぞいひける。その先隊をうけたまはれと誘ひ伏兵をもて撃んとする欲易ゆるに三巽を風とす。木と巽ハ辰巳なり。且風木と象まり。さまでハ今の狂風の鉾を傾けるをもて、その吉凶悔吝を推しに、こハ暴道に龍蛇茂林に伏兵ぶく。不意に起て撃んとて計るべ。賊の策に就く。これ亦謀あり。下河邊小三郎ハ

五十名の兵を率ゐて間道より窺ひ進みて彼杜の後ゆ遠く出賊乃先陣敗北せば。たゞ彼此ゆ火を放て件の杜を燔立よ賊の伏兵ありといふとも不慮の猛火よ遽迷ひて。その謀合期せど渠ら偽の敗軍ハ真の敗軍と好く紛れ。そこくといそぐ立ちハ高吉ハおろを引く。五十名の兵ゆその謀を使ふ。准備の火藥ハ推乃てたのびくゆ山下路の捷徑をのこめてそのそだる軍配既ゆ整へ。光仲ハ三百騎を三隊よりけく佐味高利間中守直ゆを左右ゆ備へさせ勒撞繰り。馬乘出せば。廣綱ハ百五十騎をおて徐よ後陣よ續ゆかく光仲ハ馬の足撞を早めく。ひくと十餘町ゆく。果して前面ゆ賊兵あり。両軍礮と撞見さり。間近くなりそゆ佐味竺内高利ハ馬を陣頭ゆ乘進めく。ゆまるゆめハ誰そと問ゆ當下賊將時夏之鎌乃上よ大荒目の鎧を異ゆく。備前長刀の鋼さぐりゆ菖蒲形なる戈よ挾み鹿毛なる三歳駒の太逞ゆ雲珠鞍置く打乘まろ。三十六騎の賊卒を前後左右ゆ從へく。徐と進み出ゆハ鎮守府守衛の上將刀野太郎時夏之汝ぐ摸樣大將ゆあらぐ。說諭まぐれるあれば。光仲廣綱とく出せと声高ゆゆぞ喚りる且くく。摠大將光仲ハ長巳頭ゆ旗を進めて。徐ゆ馬を乘居さりとれ甚麽なる打扮ぞ但見る花曇織の鎧直垂に小櫻威の鎧の尚已時なる戎透間もなく著下しく銀の磨著の臑當ゆ。精好の奴袴を張らせ小鶴とく五尺三寸ありける駿馬ゆ遠山形を金具ゆ磨くる鞍と置き。歎冬色の厚總懸く。三十六差しゆ大鳥羽の征箭を沿高ゆ負ふ。兜をば士卒ゆ持く面とさせ。着ゆ著ぎ左らゆ當家相傳の雷上動の弓の真中を握含。右らゆ紫竹の

光仲陣頭
時夏
罪悪を責め

光仲

伯耆七郎

時夏

鞭を揚げて。時夏をさし招く賊将時夏「ヨシ我知るやと」そ追伐の
總大将後六位上ヨシ賀藏人光仲なれと高声に名告る左に間中集
人あり。右に佐味左内あり威風凛然意氣揚々四下を拂て「ムエイ」
御方も敵もいしくも。適微妙なる大将やとおもはぬものはなけれ時夏を
睛を定めて敵の大将を熟視るに誰ぞ「ヨシ賀藏人と名告る」
媼子井平「ヨシ」と怒りに沿堪ず声を激し。
此度寄手の大将を何人と思ひ給ふ家の奴隷なり。井平奴であ
けるよ汝は下野に在りしなる主に叛くなる。義邦に内通し克覆さ
逐電せし。不忠無慙の匹夫なり。頼家暗愚の主なりとも忘れ汝を
とり立て。数百騎の大将とせしなる。命浮浪の往来
驅催し。追伐の大将と偽りて義邦が為めを怨み復さんと計らるん。

そ及ざる仮倆の項を洗ひて刃を受けと。敦圍逼て罵れば光仲悵然と
うち笑ひ汝は人を不義うて飽までに罵るとそ。その刃の不義凶悪を
いかにぞや曩に北條殿の旨に任せて汝が家に身を寓すとも素
より正しき主従にあらずそ。その賊情を諫めて遂に邪を祛り正に就き今や
天運循環して。廣綱の吹挙せしに鎌倉殿の御家人なる逆賊追
討の大将なり。汝は是恩に背き德に悖て足利左典厩を欺き奸を
經任に徴めて。その凶悪数々條に枚挙に遑あらず衆悪とそ
その身に聚り。寔に不赦の大罪人天罰逭れを知べ咎を脱れ。
て縛を受けそ。讒言に時夏「ヨシ」を使ひて
怒る。左右を見て彼生拘にと下知すれば血氣に謀の賊兵に向ひ
吐と叱る。箭を射て鋒を舞し。備を乱して競蒐に守直高利二隊に

こゝ且てく。二百騎を魚鱗ゐ備へ鶴翼ゐ揉合せく。火水ゐあれと攻こゝる。勢ひ當りこゝれば賊軍忽地ゐ閉ゑ靡ゑく八反あまり引退き且戦ひ且こゝりく。敵ゑ誘ふと數町ゆく。龍蛇茂林ゆぞ近つゑこの時日ハそゑ没果て。天ハ陰霾ゐ平日よりも黄昏ゑ早くなりゐ時分ハうと時夏ハゆく霎時踏とゞまり。戦ひのまゞ十合ゐ及ぶと刃を引く逃走こゝ高利守直馬ゑ飛し。蓬一返せと追蒐こゝ。かゝる折しも暗號とゞえく。寄ゑの陣ゐ一道の烽火閃ゑ沖る程にそあま龍蛇茂林乃後のこゝろ猛火忽然とゆえ出こ勢のヨ少ハ定ゐなゐねど斛ゐ響く閧の声大地も崩る可こゝく。草を撲箭を射ゐ駈立こ進む程ゐ時しも春の季ちゞゐ夜ハ烈しゑ山下風ゐ衆木一圓猛火ゐ焼まてく昏ゐこゝも明りけゞゐ。ゆゐ隠ゐく敵ゑ待ゐ蘇塗暴道大ゐ駭ゑ敵ゑ遣ヨ

過こゐ暇ゆく。百騎の賊兵侶共ゐ遽く樹蔭を出しゑ高利守直ゐ且ゑ見てく。されべそ大將の推察ゐ毫違ゐ賊の伏兵見れ出こ。彼引包で繫ゐ留ゐとまゐく進ぐ戦ふほどゐ又茂林の中ゐうして下河邊高吉ハ五十名の士卒とゐゐ煙を犯し。途ゑ横断ヨ。さて挾く揉こゐけゞゐ時夏暴道辟易しく。彼のゐゐ岸辟さゐゑゐ前後の敵を防ぐゐく。路を求めて脱んこを當下光仲麾ゐ揮ゐ軍ハ十分勝こゐぞ。かれく。と下知ゐ將火を勇將の下ゐ弱卒ゐゐ衆皆先を爭ゐく。奮撃突戦せざるゐゐゑ廣綱ゐ又後陣を進めく。三方ゐゐ揉合せ漏ゐをゐゞとぞ難立ゐ。いとゐ烈しゑ戦ゐゐ賊兵ゐく度を失ひく。或ハ騎馬ゐ踏殺さ。或ハ已ゐ大刀長刀ゐ辟れこゐく刃ゑ脱こゐあハ煙ゐ噎び。ゐゐ焼ヨて屍ハ累々こゐく岳の如く血ゐ

滾々と流れ川ゆ似たり。さる程ゆ四百餘騎の賊兵ゆ大うこうぐそ殺れし
ぐ。暴道時夏も。数个所浅瘠を負ひぐら。絶ゑ九餘名を引く。消
活路を切り開け城を投ーてぞ走アこる。既ゆ暮ひ来る寄るの
軍兵ども。間遥ゆ。暴道時夏見えうてこぐ。ぐく吻と息とつ。
馬を府城ゑ馳ゑせく。暫の橋ゆ立駐アこ城戸を開け。と呼ぶ。年尚
少九武者両人城楼の窓を颯とひ。て。暴道ゆとさ。招。汝ゆ
ぎや當城ハ吾們既ゆ乗取ゑり。疑ーくん名告ぐ。ゆ。せん。ゑハ故の磐
井の領主信夫荘司元春ぐ家臣ゑ。ゑ。ゑ。水草十郎昌甫ぐ一子太
郎五昌之城戸三郎守詮ぐ弟同苗四郎武詮ゑり。君父乃恥ゑ
雪ん為ゆ。ゑ。ゑ。古傷輩の義士ゆ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。相譚ひ寄るの
陣所へ推参ーく。志ゑ述んとゆ。折。汝ゆけ。ーも。數ゑ竭ーく。城を出

ゑ為体を。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ

同志の兵ふ生擒を牽立させ城こうり出く。光仲廣綱ふ名れ博を呈し。水草太郎五昌之とそもふ謀をりて。當城を乗取りくろう武告く。撃取つる衆賊の首級を実検ゆぞ入まてふけ仰。ろうれども光仲ま。おのれを疑つく。ろぶく質問けるふ信夫荘司ゲ餘類ろると。既ふ證跡分明ろまぶ。ふくく欺びく。その忠孝を稱賞し。生擒の賊兵ふ式誅戮しく。みふ首どもを梟させ。廣綱侶共士卒をるく賓きく城ふ入る程ふ水草太郎五昌之ハ三十名の兵とそもふ城戸を開く迎けり。畢竟武詮昌之ふ。いろろる謀をりく輙く城を乗取ろそ次の巻ふ。解分るを見くろうん。

朝夷巡嶋記全傳第四編巻之一終